えどせんオープンキャンパス

特別講演会

聴講無料

2017.8.5土 / 8.19土

両日とも午後3時～4時（午後1時からのオープンキャンパス午後の部と一緒にご参加ください。）

会場/江戸川大学総合福祉専門学校　大ホール

（流山市駒木474　流山おおたかの森駅から無料スクールバスで約5分）

『生きる勇気をありがとう』

セカンドベースからの生還
車いすの不死鳥

KKコンビ
と甲子園を沸かせた元PL学園野球部
1984年春夏準優勝

清水　哲　氏

甲子園で同点ホームランを放ち、飛び上がる清水哲氏。だがこの1年後にアクシデントが待っていた。（1984年、第66回全国高校野球選手権大会　決勝）

主催：江戸川大学総合福祉専門学校

プロフィール

清水哲（しみず　てつ）氏はPL学園で桑田・清原らとともに野球選手として活躍する。甲子園の第56回選抜大会で準優勝、第66回の夏の大会でも準優勝。日韓親善試合の遠征メンバーとしても活躍する。

その後、同志社大の文学部に進み、一回生の秋、関西学生リーグの公式戦、対近畿大学との試合中に、二塁へヘッドスライディングを試みた時に相手のショートと激突して首の骨を折る。頚椎4,5番の脱臼・骨折。その後、近畿大学付属病院救命センターで手術が行われ一命を取りとめる。しかし以後は四肢麻痺で(電動)車いすの生活となる。

9ヶ月後、リハビリのために星が丘厚生年金病院へ転院、1年2ヶ月後、不治のため自宅療養。8年後、父親が脳梗塞で倒れ、今まで世話をしてくれていた母親が父親の看病をすることになり、清水氏の世話をしてくれる人がいないため、病院を転々としながら一人暮しの準備を始める。

その間、仲間の桑田・清原をはじめ野球の仲間たちからは熱い励ましを受けつづけたという。枚方市で一人暮しをしながら、講演や文筆活動で多忙な日々を送る。口にくわえたスティックでパソコンを使い9年かけて書き上げた著書「桑田よ清原よ生きる勇気をありがとう」（ゴマ書房）がベストセラーとなる。

一人暮らしをして5年後に結婚。現在に至る。

1984年（昭和59年）の甲子園決勝戦

春の大会

（決勝）	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
PL学園（大阪）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	＝	0
岩倉（東京）	0	0	0	0	0	0	0	1	×	＝	1

■1984年 第56回春の選抜甲子園大会決勝　PL学園vs岩倉高校

今大会ダントツの優勝候補であるPL学園。昨年の池田高校に続く夏春連覇の偉業に王手がかかった。また、出場している81年82年の選抜を連覇し、83年夏の大会も制してここまで来たことから、甲子園で20連勝中という常勝ぶりも達成している。

チームの中心はこの大会もエース桑田と4番清原の新2年生コンビ。桑田は26イニングを投げて失点はわずかに1、打っても2ホーマーの活躍を見せている。清原はここ2試合は快音が少ないものの、3本のホームランを放っている。その二人を支えるのが史上最高と言われる固い守備陣であり、4試合で35得点を叩き出している打線である。PL学園に立ち向かうのは初出場の岩倉高校。走、攻、守、全てにおいて何枚も力が上にあるPL学園に対し、試合前の予想は不利の声が大多数であった。チームメイトは「20安打10得点まではOK」という明るい冗談をエース山口に伝えたと言われる。それが冗談にならないほど凄まじい攻撃力を持ったPL学園である。広島県王者の近大福山、東北大会準優勝の金足農業、関東チャンピオンの取手二高校、東北チャンピオンの大船渡高校と、これまで倒した相手もそうそうたるチームである。

霧雨の中で始まった1回の表、PL学園はツーアウトから3番鈴木が強烈な打球をセカンドに放ち、これがセンター前ヒットになる。4番の清原を迎え、早くも気の抜けない山口はパームボールを駆使して2ストライクに追い込み、最後はカーブで見事に三振に抑えた。何せ1番から9番まで何処からでも1発が飛び出す打線なだけに真剣の上を歩くような緊張感の連続を味わう山口投手であった。その裏、痛めている指の状態が懸念された桑田の立ち上がりは、1番宮間、2番菅沢といったうるさいコンビを素晴らしい落差のカーブで連続三振に斬った。これはやはり点を取ることが非常に難しいと感じる素晴らしい桑田投手であった。

2回の裏、岩倉高校はワンアウトから5番内田がセンター前ヒットで出塁すると、続く6番岩佐がヒットエンドランを決めてランナー1、3塁のチャンスを作る。今日の桑田の出来からしてこのチャンスをものにしたい岩倉であったが、7番武島のスクイズを桑田が見抜いてダブルプレーに仕止めた。岩倉としては痛いイニングとなったが、山口投手も好投を続けて試合は投手戦となった。変化球中心のピッチングで的を絞らせない山口投手、特に要所で決まるパームボールが抜群であった。強打のPL打線も凡打の山で、なかなかチャンスを見出だせない。一方の桑田投手は伸びのあるストレートと、落差の激しいカーブがコントロール抜群で三振の山を築いていく。7回の表、PLは初回に強烈なヒットを放っている3番鈴木から。慎重になった山口はフォアボールを与えてしまい、ノーアウトのランナーを背負う。ここで4番清原は送りバントを上手く決める。ワンアウトランナー2塁とPLはチャンスを広げたが、4番の清原がバントするくらいPLは焦っていると感じた山口投手は逆にリラックスし、5番桑田、6番清水哲を外野フライに打ち取った。

8回の裏、岩倉は先頭の7番武島がライト戦にツーベースを放つ。続く8番蓮場は強攻に出たがライトフライに倒れ、9番浅見は桑田にこの日14個目となる三振に斬られた。ツーアウトとなり、トップの宮間に望みを託したがフォアボール。続く2番菅沢は準決勝のラッキーボーイ。構わず強気に勝負に出た1－1からの3球目、高目に入ったカーブを菅沢は強振、打球はライト前ヒットとなってセカンドランナー武島がホームインした。打球が右中間に飛んだ事で、バックホームが遅れた事が岩倉にとって幸運であった。PLは最終回、1番からの好打順であったが焦りから簡単にツーアウト。ここでこの試合唯一ヒットを放っている3番鈴木は山口のストレートを改心の一撃。打球はセンターにグングン伸びていき、アナウンサーも「大きい、大きい！」と絶叫したがバックスクリーン手前で振り返った岩佐のグローブに白球はすっぽりと収まった。ここに1－0で岩倉の初出場初優勝が決まり、PLの夏春連覇の夢は砕かれた。

夏の大会

（決勝）	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
取手二（茨城）	2	0	0	0	0	0	2	0	0	4	＝	8
PL学園（大阪）	0	0	0	0	0	1	0	2	1	0	＝	4

■1984年 第66回選手権大会決勝　取手二高校vsPL学園

決勝戦は文句の無い2高校による頂上決勝となった。初戦で強豪の箕島高校に競り勝った取手ニ。箕島の御株を奪うような逆転勝ちを納めてから、のびのびと縦横無尽に甲子園を駆け巡りこの舞台まできた。対してPL学園は優勝候補ナンバー1、それもダントツの優勝候補の呼び声そのままに前半は猛打で、後半は持ち前の底力で逆転して決勝進出を果たした。

この日は台風が上陸し、雨の影響で開始時間が遅れる決勝戦となった。1回の表、取手ニは簡単にツーアウトとなった後、3番下田がセンターオーバーのツーベースヒット。番の桑原が桑田のストレートをジャストミートし、痛烈なセンター前ヒット。処理を焦ったセンターの鈴木が台風10号の影響でぬかるんだグランドによるバウンドとのタイミングが合わずにトンネル。打球がフェンスまで転がっている間に打った桑原もホームインし、取手ニが2点を先制した。1回裏、PLはツーアウトから3番鈴木が名誉挽回の右中間ツーベースヒット。続く4番清原は石田の初球をライトに流し打ち。打球はポールギリギリに飛んだが判定はファールであり、1塁ベースを回って呆然とする清原がいた。石田はこの後を抑えると意気揚々とベンチに戻った。

桑田は爪を傷めているとは言え、相変わらずの制球力で要所を抑えた。一方の石田は肩痛だったのが嘘のように切れのあるストレートとスライダーを駆使した。4回表、取手ニはツーベースヒットを放った中島を送りバントで進めてランナー3塁のチャンス。スクイズかと思いきや、強攻に出た取手ニであったが桑田に封じ込まれて追加点は奪えなかった。

PLは6回裏、桑田のポテンヒットがツーベースとなる。ここで6番北口が1塁線に強烈な打球を放ち、ファースト桑原のエラーを呼び1点を返した。続く黒木のヒットの後、清水孝の3塁ゴロが大きく跳ねてサード小菅の頭を越した。それを見たランナー北口は一気にホームを狙ったが、小菅をバックアップしていたショート吉田が矢のような送球でアウトにした。7回表、取手ニはツーアウトから小菅の内野安打。続くトップの吉田が桑田のカーブを捉えてレフトラッキーゾーンに飛び込むツーランホームランを放った。

1－4とされたPLは8回裏、ワンアウトランナー1塁から恐い6番北口が左中間フェンス直撃のスリーベースヒット。この時に取手ニ守備陣の乱れから北口が一気にホームをついて2点を奪った。

4－3と取手ニリードで迎えた最終回、PLは先頭の清水哲が石田のストレートをレフトスタンドに同点ホームラン。奇跡のPL、王者の底力で追い付いた。動揺した石田は続く松本にデッドボール。木内監督はマウンドに柏葉を送った。続く鈴木の送りバントを、キャッチャー中島が素早く処理して2塁フォースアウトにした。この一人で木内監督は再びライトから石田をマウンドに呼び寄せた。冷静になった石田は後続をキッチリ抑えた。

土壇場のホームランで追い付かれた取手ニは延長10回表、ワンアウトランナー1、2塁から中島が桑田の高いストレートを強振。大根切りに近いフルスイングは桑田の160球目を左中間スタンドに飛び込むスリーランホームランとした。爪を割りながらも投げ続けた桑田であったが、限界からかもう1点奪われてこの回4失点となった。最終回さすがのPLでも4点は重たく、最後は旗手をスライダーで三振に仕止めた石田を中心に取手ニ選手が抱き合った。試合は8－4で取手ニ高校が勝利し、優勝を決めた。

清水哲氏の著書